

近世身分支配と商人両名

はじめに

近世における商人両名とは、一人が同時に二つの名前を保持して使い分け、二人の別人とみなされる状態を指す。例えば京都近郊の百姓「利左衛門」が正親町三条家家来「大島数馬」でもある、或は京都町人「恵比須屋庄兵衛」が地下官人「前川鞆負」でもあるといった状態である。それは時間的経過を伴う改名や身分の移動・変更ではなく、二つの名前と身分格式を使い分ける、二重身分的存在形態であった。

筆者はこれまで、こうした商人両名、特に被支配身分たる百姓・町人であると同時に、支配身分たる士分でもある二重身分に着目して、身分別支配、殊に支配身分と被支配身分との峻別を原則とする近世身分秩序の矛盾を指摘してきた⁽⁴⁾。しかし彼らは、何故どちらか一名義に統一せず、二つの名前を

使い分けるのか。二重身分は、何故商人両名という形態をとるか？ という素朴なようで根本的な疑問こそ、本稿の起点である。

近世身分論は、朝尾直弘氏以降、身分集団をめぐる問題を検討の中心として進められてきた。朝尾氏は身分的中间・境界領域における身分の移動や、町人が武士を兼ねる事例など、従来固定的なものと見做されていた近世身分の柔軟性を指摘した⁽⁵⁾。その身分集団論を引き継ぎ「近世の多様な人々とその集団のあり方」の解明を目指した「身分的周縁」研究では、八王子千人同心、牧士、山門公人、公家家来や地下官人など、いわば「武士でもあり百姓・町人でもある」という二重身分的存在形態も分析の俎上にあげられた。朝尾氏や身分的周縁論は、主にこうした二重身分を、限定的な身分の変化、一時的身分状態と解釈しており、確かに身分集団側は、二重身分

尾 脇 秀 和

である対象を、自らに属する「身分」(主)の存在が、他の身分を時間的空間的制約つきで「職分」(副)として兼ねると解釈することで処理していた。⁽⁹⁾ またその他にも、近江国辻村鑄物師が、居住地の百姓身分のまま、他国出店・出稼先の人別に入る「寄留形態にともなう二重身分」といった、支配の領域を跨ぐことで発生する二重身分の事例も明らかにされている。⁽¹⁰⁾

近年、深谷克己氏らを中心とした「人と身分」という視点、即ち身分を従来の身分集団ではなく、「個人」という単位で考察する、新たな身分論も提示されている。⁽¹¹⁾ そこでは「人が同時に複数の身分をもつこと」は考察上の前提とされ、その上で「人(単数)にとって身分とは何か」を問い、「個としての身分」や「属性」の多様性から、近世身分の実態に迫ろうとしている。尤も「個」への支配・把握が、身分集団に依拠するものである以上、大橋幸泰氏が指摘するように、集団と個人の関係を整合的に検討し、理解することが重要である。⁽¹²⁾ これらの先行研究においては、一人による二重・複数の身分兼帯自体は指摘されつつも、その際とられる存在形態の特徴、つまり同一名義での兼帯ではなく、名前を使い分ける忝人兩名となることに着目して、そこに重要性を見出すことはなかった。名前は身分格式や職業などの社会関係と、密接な

関係を有することが指摘されているが、忝人兩名という存在形態には、如何なる意味・理由があるのか。また近世社会において、それはどの程度確認されるのだろうか。

近世身分とは、集団を媒介とする「支配」により、公的に決定・認知される個人の社会的地位であると措定する。そうした個人の身分は、名前を通じて支配・把握されるのであるから、当然身分・支配・名前は不可分の関係にある。個人の身分実態と、それを決定・認知する支配との関係に着目して、忝人兩名という存在形態を分析し、その意味を考察することは、近世身分の特質を解明する上で重要な視点になると考える。

本稿は上記の問題関心から、主に近世後期における忝人兩名の諸事例を博搜して、どのような場面で忝人兩名が発生・存在し、それは如何なる意味・理由を有していたか、支配身分(士分)と被支配身分(百姓・町人等)を両有する二重身分のみならず、百姓による町人身分の兼帯等、支配を跨ぐ際に発生する様々な忝人兩名を対象として、その身分・支配・名前の関係に着目し、近世忝人兩名の共通的意义とその本質を明らかにしたい。

なお、近代になると、個人の名前は国家による重要な統治手段となり、戸籍上の名前のみに制限する一人一名化が強制

される。¹⁴その際、従来性質の異なる近世~~一人~~両名と複名習俗との混同が生じ、~~一人~~両名という用語の意味が変質する。本稿が近世~~一人~~両名という用語を使用するのは、近代以降の~~一人~~両名との差異を論じる必要からである。本稿はこの点も踏まえ、近世~~一人~~両名の終焉から、その特質の照射も試みる。なお以下引用史料の傍点は、考察上、全て筆者が付したことを注記しておく。

一 兩人別と株取得

(1) 近世~~一人~~両名の定義

本章では、~~一人~~両名の発生要因として、兩人別・株取得の実態を確認するが、その前に、まず本稿の前提として、~~一人~~両名という用語の近世的意味を検討・定義しておきたい。

~~一人~~両名は史料上、「~~一人~~両名」の他、「一人二名」「一身二名」「一体二名」「一鉢両名」「一家両名」(壹・一、貳・二、鉢・体は通用)等の同義語があり、原義は「一人で二つの名を持っていること」である。¹⁵原義での用例は、『日本書紀神代卷抄』(室町中後期成立)に「火折尊ト彦火々出見尊トハ、同者也、一人二名也」¹⁷、延享四年(一七四五)『肉髻問弁』に「初生ヲ筍ト名ク、成長スルヲ竹ト号ス、一体二名ナリ(中

略) 弥陀如来ト甘露王如来ト名ハ二ツニシテ体ハ一ナリ、一体二名其例甚多シ」¹⁸、天保八年(一八三七)『柿本靈神祭日考』に「^{神本}人麻呂・赤人は一人、^{山部}両名と云説あり」など数多あり、古くから二つの名前が同一のものであることを説明する際に用いられる。しかし近世~~一人~~両名を理解する場合、この原義の理解では十分ではない。近世の人々が、如何なる現実の行為・状態を~~一人~~両名と呼んでいたか、~~一人~~両名が多く存在した近世後期における文芸作品等での用例を検討し、定義づけてみたい。

随筆類では、『よしの冊子』(文政十三年へ一八三〇頃成立)に「番町邊の御旗本に一人、^{い、い}両名の者有之、武芸ニても仕候時ハ自分の本名を申、又金をかし候時ハ浪人ニ相成、名前違ひ申候由(中略)右一人、^{い、い}両名と申事発覺」などを始め(この事件は二章で詳述)、「一人両名」の用例が多くみえる。²⁰平秩東作は紀行文『花戯帳』(天明三年へ一七八三頃成立)で、多くの雅号を持つ俳人各務支考について、「しかし支考殿ハさて名の多い人なり。~~一人~~両名ハ天下の御法度なるに、蓮二といふたり、南花東花など、毎度余人かと存じて、ぶ調法な御挨拶を申てきのどく也」と諧謔的に記している。²¹滝沢馬琴は『吾仏乃記』において「川口新次郎は(中略)名主今村幸右衛門の別名歟といへり。しからは一人、^{い、い}両名也。い

よく／＼得がたし」と使用している。⁽²²⁾

幕末期の漢方医・尾台榕堂の随筆『方伎雜誌』(明治三年へ一八七〇)刊、榕堂は同年七二歳で没)には、次の逸話が見える。⁽²³⁾

板倉藩の斎藤鋳之助は、足腰の痛みを覚えて医師の診察・治療を受け、最初治療を受けた藩医は「疝」、二番目の医師は「脚氣」、三番目の医師は「打撲」と診断した。しかしいづれも治療に効果がなく、斎藤は榕堂に診察を乞い、その病名を問うた。榕堂は次のように答えた。

余戯レニ云フニハ、一人、両名ハ、天下ノ御禁令ナリ。然ルニ只今マデ。或ハ疝。或ハ脚氣。或ハ打撲ナド、。幾ツモ名ガ付キシ故。僕ハ名ハ申サズト云ヒケレハ。病人^(斎藤)モ大嘘シテヤミヌ。

これは同病に複数病名がついたことを「一人兩名」に喩えた笑話である。「病人モ大嘘」(大笑)というオチを考慮すれば、両者に「一人兩名ハ。天下ノ御禁令」という共通認識があったことも裏付けられよう。⁽²⁴⁾

歌舞伎での使用は、文政十年初演の歌舞伎「独道中五十三駅」での「菊五郎も梅幸も同じ事だ」「一人、兩名カ。とんだお尋ね者だ」という台詞の他、嘉永六年(一八五三)初演「与話情浮名横節」の幫間甚八の台詞中には、「これから夏

場をかけては、幫間の甚八も、五行亭相生と名乗つて、夜は川端へ寄席をかけ、昔噺しの一人、兩名、たんまりとしめる積りで参りました」とみえる。⁽²⁶⁾ 幫間甚八が、噺家としては五行亭相生と名乗ることを、おどけて「一人兩名」と称しているわけである。

近世後期の川柳集『誹風柳多留』天明元年刊十六篇には「壺人兩名とむらい帳につき」、天保三年刊百十七篇には「一人兩名お万鮓お万茶や」とみえる。⁽²⁷⁾ 前者は壺人兩名の人物が香奠帳に二名として記帳される様を揶揄したもの、後者は「お万鮓」と「お万茶屋」とが、お万による鮓屋・茶屋の一人兩名のようだとの諧謔の謂いである。

このように壺人兩名の用例は、随筆、歌舞伎、川柳のほか、以下本稿で示す触書や百姓町人の願書類等でも枚挙に遑がない。近世後期までに用語がかなり浸透し、一般にも理解されたことを示している。

これらの用例をみると、芸名・俳号の使用まで壺人兩名と表現され、原義の意味で十分にも思える。しかし前近代において、殆どの全ての人間は、人生の諸段階における改名慣行によつて、一生間に複数の名前を使用し(タテの複名習俗)⁽²⁸⁾、また通称・実名(諱)・号等を同時に有した(ヨコの複名習俗)が、近世においては、これらが「天下の御法度」たる壺

人兩名とはみなされなかったことに、十分留意しなければならない。

その理由は、支配側から見た³⁰ 𡵿人兩名の「制禁」意義を考察すれば明瞭になる。例えば天明四年三月、佐渡奉行の被仰書に、「当国中是迄³¹ 𡵿人二而名前二つ持候もの共有之趣二而、以之外心得違ひ成儀二者候得共、是迄之儀者捨免候間、以来宗門人別帳ニ記し候名前之外、兩様名前出候もの候ハ、急度咎可申付候」とみえる。宗門人別帳に記載された名前を唯一とし、それ以外の名を公の場で「兩様名前出」す行為を禁じたものであり、その目的が公の場での二重名義使用による支配の混乱回避にあるのは明らかである。また津山藩でも、寛延二年（一七四九）、百姓が「𡵿人二而公儀名・内証名と二ツ付」ることを「万事紛敷事」だとして、「𡵿人兩名無之様」にと禁止している³²。これも宗門帳に記載された「公儀名」以外の「内証」の名を公の場で使用することによる支配の混乱を排除するための禁令であり、いずれもタテ・ヨコの複名習俗自体を³³ 𡵿人兩名として禁じるものではない。

つまり支配側が「制禁」たる³⁴ 𡵿人兩名とするのは、公の場において一人が二名を保持して別人の如く使用し、更には二つの名前で二重の把握を同時に受け、「支配」を紊乱せしめる行為・状態に限られる。近世の³⁵ 𡵿人兩名は、この「制禁」

たる³⁶ 𡵿人兩名の意味を前提に、一人が持つ二つの名前が同一人物か否か、他者から判別困難になる紛らわしい状態が、一般にも³⁷ 𡵿人兩名と呼ばれたのである。原義では³⁸ 𡵿人兩名と表現できる複名習俗が、近世において、³⁹ 𡵿人兩名と呼ばれない理由は、近世の人々が等しく複名習俗を有し、それは時間的経過を伴う改名や公私両面での名義の併用ではあっても、公儀名が一つであれば「紛らわしい状態」ではなかったからである。先の随筆・川柳等での諧謔が、この意味を前提としなければ成立し得ないことは明らかであろう。

以上から、近世⁴⁰ 𡵿人兩名とは、一人が同時に二つの名前を別人の如く、或は別人として使い分ける行為・状況で、他者から一人が二人の別人と把握・認識される（或はさせる）行為・状況と定義づけられるのである。

（2）出店・出稼と兩人別

近世社会は、支配ごとに作成される宗門人別帳により、各身分に登録・確定される「戸籍制度」を基本・特質とする社会である。故に兩人別（二重戸籍）は処罰の対象であった⁴¹。しかし現実には、百姓・町人の出稼・出店の展開による人別改の重複が存在し、当時から問題視されている。中井竹山は『草茅危言』（寛政元年（一七八九）成立）で、「親元の人別

に入乍ら、又主人方の宗旨に入ば、是又往々一人、兩名也、混雑の甚敷者也。坊長里長は何の糺も無、其係戸籍を編て官に献ずは、總計にて萬人有中にて、二千三千必重複せる虚数⁽³⁵⁾だと指摘している。「二千三千」には誇張があろうが、人別改は各地域で作成方針の相違もあり、重複者の存在は事実であらう。

兩人別とそれに伴う⁽³⁶⁾ 𡵿人兩名は、個人が支配の異なる地理的領域をまたいで活動したとき、各地で発生し、時に問題化した。例えば百姓の商業従事、出稼・出店による⁽³⁷⁾ 𡵿人兩名についてみると、天明五年、尾張藩は「村方之者之内、𡵿人二、名二ツ有之、百姓二而ハ何と名乗リ、売用二而ハ何と申類、万一有之候ハ、早速為相改、一名二可為致事」と、百姓に商業上の別名使用を許さず、一名化を指示している。また文政十二年八月、萩藩では「一人、兩名は天下、一統の制禁也、諸郡より萩え出、当時家を構へ家子引連居候もの内、所望の方え滞留、或ハ奉公稼の唱へにて古郷の人別え入、宗門等も相調来候者間々有之」と、出稼奉公などによる⁽³⁸⁾ 𡵿人兩名・二重戸籍を指摘した上で、「只今住居の地の人別入、古郷の帳を除」き、「𡵿人兩所二名を名乗り不申様取糺」すよう、町奉行・代官中へ指示している。

こうした規制の一方、出店・出稼による兩人別・𡵿人兩名

は慣習化している面もある。例えば全国各地に出店を構えた近江商人は、本国では多くの場合百姓であるが、出店先では本国の百姓名とは別名で活動していた⁽³⁹⁾。

しかし天保十四年、密貿易疑惑に関する訴訟において、近江商人の松前出店支配人藤野喜兵衛が、本国の近江国愛知郡下枝村の人別にも入っている「兩人別」であることが公儀沙汰となる。評定所での吟味の結果、「松前出店支配人喜平、江戸表二而一身二名二相成候罪故、町払」となった。この事件を契機に、彦根藩の請負人たちは、本国人別と松前人別とを、七年ごとに切替る方法をとることになったという⁽⁴⁰⁾。

この事件は同様の出店人にも波及し、松前藩は「古ク仕来候事とも乍申、其儘ニ難被指置」として「兩人別之姿」のものに松前への引越を命じ、拒否すれば場所請負をさせないとした。これに伴い、近江八幡（尾張藩領）では松前へ出店している者の名前について尾張藩より尋問があり、弘化二年（一八四五）、松前出店支配人の兩人別・𡵿人兩名が表面化する⁽⁴¹⁾。その一人は近江八幡「松前屋ため」の松前出店支配人「蛭子屋半兵衛」である。半兵衛は近江国愛知郡柳川村人別の「藤兵衛」であり、出店支配人として蛭子屋半兵衛と名乗りつつ、藤兵衛の名前では依然「柳川村宗門帳ニ茂載居候者」という兩人別・𡵿人兩名であった。また同所「松前屋い

く」の松前出店支配人は、「住吉屋徳兵衛与申名前二而右表宗門帳ニ載居」者だが、実は八幡町宗門人別帳に属する「酒屋吉兵衛」で、主人松前屋の指示で、松前店支配人としては「住吉屋徳兵衛」と名乗る兩人別・一人兩名であった。松前屋側は尾張藩に、「住吉屋徳兵衛」は経営上の「通り名」であると説明しており、実態としてそれは事実であろう。しかし松前藩からみれば、「蛭子屋半兵衛」や「住吉屋徳兵衛」は、自領支配下の実在する町人として把握・支配されているのであって、兩人別・一人兩名に他ならない。松前屋は八幡役所に対し、かかる支配人の兩人別は「江戸并京大坂表江諸国より出店之振も同様之儀」で、「数百年仕来通二而御差置被成下度」と歎願し、強いて引越を命じられるなら、支配人の人別を「十ヶ年限切替」で調整することを願っている。

近江商人は何故出店で別名を使うのか。宇佐美英機氏は、近江日野商人の出店での名前（「店名前」）が本国人別とは別名で設定される理由を、出店が倒産した場合、日野の本宅や他の出店への影響を回避するためとしている。⁽⁴²⁾ 本国の名前と異なる商人としての「店名前」「通り名」は、商業経営上、譲渡（売買）によって獲得・継承される、いわば会社名の如き「株」の名前（名跡）であり、従来こうした商業上の株買得などに起因する複数名の保持は、商業経営上の便宜による

ものと解釈されてきた。しかし出店の所在地において、その「通り名」「店名前」が実在する領民の名前として、人別帳に記載され、その地で領民と把握・支配されている点を重視する必要があるのではないか。従来、複数名の名前（勿論複名習俗の意味ではない）を持つ存在と支配側との関係は十分に検討がされていないが、支配・名前という視点から、「株」（とその名跡）取得の問題を検討する必要があると考える。藤野喜兵衛一件で明らかのように、近江商人の存在形態は表面化した場合、禁制たる兩人別・一人兩名と見なされ、処罰の対象となっている。彼らが同一名義ではなく、百姓藤兵衛Ⅱ蛭子屋半兵衛といった一人兩名を使用する背景には、商業上の便宜や慣習以上に、同一人物が二つの支配に入る二重身分が、各領主・身分集団を単位とする近世身分別支配の構造上認められないことを意識して、表面上これを回避する必要がある行なわれているとみるべきであろう。⁽⁴³⁾

(3) 二つの「株」と名前

「株」の取得は、一人兩名の大きな発生要因である。家業・家産・家名が一体となった「株」という近世的概念は、百姓株は勿論、商業上の株のほか、相撲年寄株・木戸番株等⁽⁴⁴⁾ 数多存在し、異なる二つの身分取得をも可能にした。株その

ものと名前が一体になっている場合、従来とは異なる名前を獲得することにもなる。しかし株を買得しても、従来の身分と、新たに取得した株の名前や性質とが、一つに統合されるわけではなく、一人が二つないし複数の役を、別名で果たす状態も発生した。

異なる身分の株取得が一人兩名とされた事例をみよう。天保十四年九月、土屋勝右衛門知行所武州入間郡中野村百姓らは、「不正之取計」をした地頭所用役山下荘左衛門と、これと結託した江戸の百姓宿大里屋茂兵衛らを訴えた。その際、同村百姓惣代は、大里屋茂兵衛について、「拾七ヶ年以前家作取潰御当地江^{江戸}罷出、御百姓宿之株式を買請」て渡世するようになった元同村の小前百姓であり、依然「村方ニ而者百姓伊平治、御当地ニ而者大里屋茂兵衛、一人兩名之者」であるので、大里屋茂兵衛を中野村百姓伊平治として「村方江立戻り、百姓永続仕、村人足等相勤候様仕度義ニ御座候」と糾弾している⁽⁴⁷⁾。百姓が江戸町人である「御百姓宿之株式を買」つたことから生じた状態が、一人兩名と呼ばれている。

また天保十四年の人別改令改正の影響で、弘化二年八月、陰陽師触頭藪兵庫と神職卅日宮大夫が同一人物である一人兩名が発覚している⁽⁴⁸⁾。即ち「兵庫儀、正徳度より親族之因を以、卅日宮大夫職業をも代々相兼候由ニ候得共、是迄奉行所江呼

出候節者陰陽師触頭之場合に而、藪兵庫与唱罷出、御釜^ノ御用之節、御春屋江者卅日宮大夫と名乗、被下物等も右名目を用、以請取来候段、従来之儀与ハ乍申、全一人兩名を、唱候儀、二而、仮令同職ニ候与も不都合之筋」とされ、以後藪兵庫は陰陽師触頭のみを勤め、卅日宮大夫は悴藪左京に相続させて、一人兩名を解消する措置をとっている。いわば陰陽師藪兵庫は、神職卅日宮大夫株を保持して一人二役を演じていたが、この時間問題視されて解消したのである。これもいわば「株」と化した身分の二重保持による名前の使い分けが、改称すべき「不都合」な「一人兩名」とみなされている。

町人が別名で他町の屋敷を所持した場合も、一人兩名と呼ばれた例がある。弘化二年十二月、町年寄より町奉行所へ提出された内密の上申書によると、江戸牛込早稲田町名主虎三郎後見場所である江戸四谷太宗寺門前の家主武兵衛が内藤新宿の旅籠屋としては「旅籠屋武兵衛名前」で「人別差出し所持罷在、一人兩名」の状態だったところ、同年二月「御廐博突一件」で、「旅籠屋武兵衛」が召捕えられて預り中に病死した。虎三郎は武兵衛の「一人兩人別取隠可申ため」、四谷太宗寺門前家主武兵衛の方は、武兵衛の妻の弟を武兵衛と改名させ処理したという。これも株取得の問題が背景にある一人兩名・兩人別であった。

株取得とも重なる新たな身分取得として、百姓・町人の神職化や公家や諸藩等の家来化などの問題がある。これらの身分は苗字を公称し、国名や百官名などの格式の高い名前を名乗るため、従来の百姓・町人の名前とは異なる名前を獲得することになる。しかし両身分を保持する場合、やはり一つの名前に統合されず、従来身分のまま別の支配にも属し、𡵈人両名の存在形態をとる者が生じた。⁽⁵¹⁾

陰陽師は、寛政元年七月に関東陰陽道触頭吉村市正が寺社奉行松平紀伊守へ差し出した売卜組掟書のなかに、「一、雖為子弟、無届内分ニ而陰陽道為致間敷候、官名を名乗、又者一人、両名不相成候事」とあり、寛政三年四月に土御門家江戸役所が作成した「陰陽道条目」でも、「無許状ニ而官名名乗、又者𡵈人両名ニ而職業不相成」としてその𡵈人両名を禁じている。⁽⁵²⁾しかしこのような禁止が明記されること自体、実際には百姓神職同様、𡵈人両名が存在した反証でもある。

富士山の吉田御師も、「御師株」化して、百姓による買得が進行し、その結果、百姓の名と御師の名を「一人ニ而両名相名乗」事態が生じていた。⁽⁵⁴⁾

神事舞太夫にも「神職名前」と「百姓名前」を使い分ける存在があった。天保十四年、武蔵国入間郡氷川村の「神事舞太夫 石山豊後」は、その実「百姓文吉」であったことが問

題視された。文吉は代官所に無届で神事舞太夫の許状を受けたことを理由に手鎖に処されている。⁽⁵⁵⁾

以上、𡵈人両名の発生要因として、出稼・出店による兩人別や株(身分)取得の実態を見た。𡵈人両名は複数の支配を跨ぎ両属する状況が発生した時、様々な身分・地域において発生し、時に問題視されたのである。

「制禁」の建前に反し、広く𡵈人両名が行なわれたのは、個人による支配をまたぐ活動の多様化と、それによる身分別支配を原則とする従来の秩序との齟齬を、表面上解消する目的と考えられる。次章ではそうした齟齬を調整するために𡵈人両名が利用された事例等から、𡵈人両名という存在形態の意味を考察することにした。

二 支配重複の調整

(1) 身分違の土地所有

本章では、𡵈人両名という存在形態によって、現実の支配重複・二重身分が調整される事例を確認し、𡵈人両名が身分別支配を存立させる調整作法として行なわれていた実態を明らかにする。

前章では、他領間における兩人別の𡵈人両名を指摘したが、

同一領内でも、武家地・寺社地・町人地・百姓地等に分かれ、その支配は異なる。身分・職業・居住地を一体とする所謂三位一体⁽⁵⁶⁾の建前、身分別支配の原則が、近世には社会的通念として存在し、この支配を跨ぐ身分違の所屬・土地所有は原則禁止であつた。しかし現実には武士による百姓地所持など、身分違の支配に属する事態が発生した。こうした支配の矛盾を調整するため、士分でも百姓地では百姓ということにする、売人兩名の方法が利用された。

近世後期の萩藩では、藩士や陪臣で萩城下付近、または諸郡に居住して、私有又は預かりの田畑を耕作することを「給人作」と呼び、この場合、耕作については武士身分を認めず、百姓同前に扱い、庄屋の支配とされた。⁽⁵⁷⁾士分でも年貢に関することは検地帳・名寄帳すべて百姓名前（「下札名」という。貢租納入の令書を春定下札といい、下札名はその名義人、即ち貢租負担者）で登録され、下札名には士分としての名を用いず、苗字なしの百姓名前を使用する売人兩名が行なわれた。例えば藩士林久右衛門（無給通）は、下札名は苗字なしの久右衛門で、文久二年（一八六二）の訴訟時も百姓久右衛門と名乗った。また同藩土渡辺新七（無給通）は下札名として「七助」を使用し、武士としての名前とは全く別名であつた。⁽⁵⁸⁾更に同藩は武士のみならず、寺社による百姓地所持も同様の

調整を行い、同藩領熊毛郡勝間村厳島神社は、架空の「宮蔵」なる下札名を設定して貢租を負担し、明治の地租改正でもこれを用いた。寺社の下札名使用は明治十年（一八七七）まで続いたという。⁽⁵⁹⁾

加賀藩では、真宗道場主が、僧侶と百姓とで別名を設定・使用していた例がある。⁽⁶⁰⁾例えば砺波郡下梨村瑞泉寺は、嘉永元年（一八四八）の由緒書の中で、天正十三年（一五八五）に加賀藩から地方役人（十村役）として「年貢納所等取立」を命じられた際、「僧分瑞泉寺二而者公用指支之筋二候間、別名梨ノ市助と名乗、向後公用可相勤旨被仰付、是乃寺国法之両様売人二名而相勤申候」と述べており、僧名瑞泉寺としては寺院としての支配をうけ、市助という名義では百姓として年貢諸役を勤めていた。支配の異なる寺院と百姓とを、建前上別名を使い分けることで、身分違や支配の重複を解消していたのである。

武士による町人地所持においても、売人兩名と関連する名義上の調整問題が存在した。江戸では享保十一年（一七二六）に原則身分違の土地所有は禁止されていたが、その後手続きを踏めば許容されるようになった。しかし実際には、以降も正規の手続きを踏まない身分違の土地売買が行われた。⁽⁶¹⁾

深川熊井町名主理左衛門が天保十二年九月に提出した「地

所之儀ニ付内密調書」によると、武家による町人地の所有屋敷・土地の台帳記載は、①「御武家方御直名前」で譲渡され、屋敷改にも届出がなされた、いわば正規の買得手続により、沽券上も武家本人の名前が記載されたもの、②実は武家が買得しているが、沽券上は町人名義で買得しており「内々御武家方御所持二而茂表向不顯」もの、という二種があった。②はあくまで表向町人屋敷だが、実は無届の武家所有で、台帳上名義が武家の「御召仕女中、或者立入町人・医師之妻子、厄介人之名前」にしてあるもので、武家以外にも「神主・寺院持二而、表向町人名前」にしている者があったという。その実態を、町の五人組や名主は「内実之所持主を薄々承」ている場合もあるが、本当に「極秘候而、実々不相分」ものもあった。町名主は、かかる状態が「吟味筋」となって「内実之持主、𡵿人二而名前ヲ種々ニ差置候儀顯」れた場合、処罰の対象になることを承知しているが、町としては「表向町人名題二而、町役相勤、町入用差出候得者、其上之穿鑿不仕心得」であると述べている。

この回答には、町側の本音が含まれていて興味深い。町としては、町屋敷の持主が誰であろうと、他同様「町役相勤、町入用差出」て表向き問題がなければ、実態を穿鑿する気はないのである。「表向町人名題」とは、身分違の持主本人と

は別の町人名代が設定されている状態だが、「名代」（名題とも表記）は時に𡵿人兩名の温床であり、実は名代が武家本人の別名（架空の町人名前）である場合も存在したのである（後述）。

以上の例からは、身分違の土地所有の場合、身分違の本人が、その地に応じた身分の名前を名乗る𡵿人兩名により、建前上、その領域の支配に相応する身分の者だけが存在する状態を作り出すことで、支配の重複や身分違の矛盾が存在しないものとして調整されたことが知れよう。「御法度」であるはずの𡵿人兩名が、ここではむしろ支配の矛盾を調整するために積極的に使用され、一種の作法と化している。こうした調整には、近世の支配が、個人の多様性を直接一元的に把握・管理する意識を持たず、各身分別支配の表面的実現を最優先する特質が、如実に表れているといえよう。

（2）前島一件の処理

—浪人吉田平十郎と旗本前島寅之助—

前章でも述べたように、複数の身分を株の買得等で獲得しても、それらが取得者個人の性質として、一つの名前に統合・一元化されるわけではない。この点に留意すれば、当然の疑問が生じよう。例えば百姓・町人が武士身分の株を買得

した場合、従来身分の名跡や、その名前で所有していた財産はどうなってしまうのか。士分となれば、もう農商業を営む事はできない。従来の身分（名跡）を息子等に相続させ、父子で身分を異にする方法等もあるが、⁽⁶³⁾家族のいない者、自分の財産を家族にすら渡したくない者は当然存在する。ここにおいて、武士と百姓（又は町人等）、そのどちらでもありつづけるための方法として、⁽⁶⁴⁾一人兩名が形成される。次にその実例を見よう。

寛政元年（一七八九）、旗本前島寅之助が、実は同時に金貸し浪人吉田平十郎でもある一人兩名が発覚し処罰された。

『寛政重修諸家譜』によると、⁽⁶⁴⁾旗本小普請組前島寅之助武教は、「もとは卑賤のものゝ子」であつたが、御書院番組与力となつて水野定八と称し（のちに与力を辞して）、「処士となりて吉田平十郎と名のり、そのゝち（旗本の）宇垣貞右衛門某か弟と偽」り、天明七年（一七八七）十二月に旗本前島寅之丞信吉の「養子となりて其家を繼」いだ。しかしその後「元の名、吉田平十郎と号して」「財用を賄ひ」、つまり元の名前で依然金貸業を営み、「かしを⁽⁶⁵⁾きし金銀催促等のときは、なをも処士平十郎と称」して活動した。故に寛政元年十月、その「始末、おほやけを恐れざる所行曲事なりとて、死罪に処せら」れ、同家は絶家した、とある。

この事件は、同時代に記された『よしの冊子』・『翁草』に多くの記事がみえる。第一章で触れた「番町邊の御旗本に一人兩名の者有之」とは、この前島のことである。両書の記事を整理すると、前島寅之助は、もと「長崎奉行の役人」、或は元石谷淡路守の足輕ないし柘植長門守の給人で「長崎表へ」行ったことのある人物という。しかし「金をため」て幕府大番与力の株を買い「水野定八」と名乗り、その後与力をやめ、「金子所々へかし、色々の山事」をする「金かし浪人」となつて「吉田平十郎」と名乗つた。のち金を貸していた旗本前島氏が返済を滞らせると、丁度旗本宇垣氏の弟が出奔したため、平十郎をその弟と偽装し、更に前島氏の養子となつて家を繼いだのだという。彼は旗本となつた後も、「金公事にてハ平十郎と相名乗、町奉行へも出」ていたとも記されており、両書の記述は、『寛政重修諸家譜』ともおおむね一致する。

一人兩名の発覚は、寛政元年の夏、浜御殿での騎射上覧があり、前島寅之助が役儀で御成先の用を勤めた時である（『よしの冊子』は前島本人が的を射たとする）。その時人々の間から、「それ金かし浪人が見分二出たとどつと笑」が起きたのである。御供の諸士のなかには、平十郎から金を借り、彼を見知っているものが数多いためであつた。流石に「風

聞相広り候て難捨置」状況になり、小普請支配松平但馬守・組頭兩人らが相談し、もはや「上へ不申上バ成まい」との声も上がった。しかし小普請筆頭酒井因幡守は「公辺沙汰」にすることを承知せず、「其位の事を糺すと小ブシンハ大駄潰さねバならぬ、捨置がよい」、「前島を上へ申上潰候ハ、其類ハ御旗本にハいくらも有、不残ハ潰されぬ」と述べ、前島糾明の回避を計った。しかし結局「前島一件」の吟味は回避不可能となり、事件は前島の死罪を以て落着する。

『翁草』がこの事件について記した寛政元年十一月時点では、前島一件がまだ「吟味半」であった。『翁草』の著者である元京都町奉行所与力神沢杜口は、旗本・御家人の株売買は「今さらの事にあらず」とし、事件の要点は「就中一人、二名の事尤六か敷由」と記している。つまり吉田平十郎＝前島寅之助という売人兩名が、吟味上「六か敷」問題を引き起こしていると伝聞していたのである。酒井因幡守のいう「其位の事」が、旗本株売買か、前島同様の売人兩名であるかは判断できないが、少なくとも前島の状態を「其位の事」といえるのであれば、同様の売人兩名も相当数存在したと考えるべきであろう。前島一件は、結局他の小普請旗本に波及する事はなかったが、人々はそれを「前島一件余り広がり不申相済候は難有事也」⁽⁶⁹⁾と沙汰しあったという。

『以上并武家御扶持人例書』には、旗本・御家人が町人になりすましたとの廉での処罰事例が多く見える。⁽⁷⁰⁾例えば寛政四年、表御台所頭支配の無役川嶋力次郎は、身上不如意であったため、見かねた父儀右衛門が中間奉公へ出ると言い出し、力次郎は「町人之名前二成」ってその人主となり、儀右衛門を三浦志摩守方へ中間奉公に差し出し、これが発覚して力次郎は中追放となった。また寛政七年、小普請組柴田宇右衛門の悴柴山勝之進は、不如意のために下谷金杉村の百姓十郎右衛門方に世話になつており、大小を帯びず「勝藏」と名乗つて日雇稼に出かけたことが発覚、江戸払となった例等がある。しかし前島一件を考慮すれば、身上不如意という常套句の裏に、本来彼等が旗本・御家人株を買得した百姓・町人で、売人兩名であった可能性をも想定すべきであろう。

(3) 紀州藩の調整方法

前島が町方支配を受ける浪人身分を残したのは、旗本では金金融業を営めず、また平十郎として蓄積した財産、特に土地・屋敷の所有名義上の問題が存在したためであろう。百姓・町人が士分株を買得した場合、従来身分に付随する財産や地位を保持するため、元の名前と身分の別人別(戸籍)⁽⁷¹⁾を残す売人兩名が相当存在したとみなければならぬ。かかる存

在への対処は、地域により区々であつたであろうが、支配側は何らかの方法でこうした商人兩名を穩便に処理しなければならなくなつた。

嘉永五年（一八五二）七月に発せられた次の紀州藩の触書は、町人による同心株等の買得によつて生じる商人兩名の解消方法つまり調整方法を、公の側から指示した点で興味深いものである。⁽⁷²⁾

町湊 大年寄共

近年町人共方同心等勤人ニ相成候者、矢張町人名前を居、出店等も其尽ニ而商売致居、一人、兩名之者有之、町人共取締方ニ差支候事候、右跡勤人ニ而店を張、商売致し候者、丁々ニ而取調之上、商売致度候ハ、家内之内何れニ而も一人町人別ニ致し、右名前ニ而商売致し候様取計候ハ、若名前人ニ可致家内無之筋者、店を張商売致し候義不相成候筈候間、其段申聞、夫々当月中限ニ取計、其段可申出候、万一受用不致者も有之候ハ、是又可申出候

右之趣組合限不洩様相触可申候

七月

当時紀州藩では、同心株等を買ひ「勤人」となつた町人が、もとの町人名前を依然保持して商売を続ける「一人兩名之

者」となり、「町人共取締方」に支障をきたす状況が問題化した。そこで紀州藩は、その勤人の家族のうち、誰か一人を町人別に入れて「名前人」（町人としての当主）に設定することで、商店を営むのは勤人ではなくその家族の町人であるという状態をとらせ、勤人が商人兩名で商売をする状況を表面上、解消するよう、調整を命じたのである。この場合、勤人にして実態上町人当主たる人物は、その名義上の町人当主（家族）の「同居」人と処理されることになるから、町には町人しか居ないという状況が表面上作り出せ、懸念された町の秩序はこれで維持できる。尤もこの調整がなされても、その実町人としての経営を掌握しているのは、当然勤人本人であらうから、実態は何も変わらない。また、「名前人ニ可致家内無之」場合は商売を禁止しているが、次節で述べる盛岡藩の例などを見れば、その場合は實在しない架空の家族（従来の町人名前）を「町人別」の「名前人」に設定する商人兩名となり、表面上実在する家族の「名前人」設定と同じ状態として調整される。⁽⁷³⁾この架空の「名前人」処理の方法に、紀州藩が気付いていないとは思えないが、この触の目的は、その文面からも明らかなように、表面上商人兩名でないよう、人別把握を上手く処理することだけである。藩側は身分別支配の建前が表面上穩便に治まれば、強いて商人兩名の真実を

穿鑿する意図はない。この触は忝人兩名への処理について、実に率直な意識が表れているといえよう。

(4) 花輪正摸の証言

佐藤屋庄六は、盛岡藩領花輪町に居住した豪商で、度々の献金により御城下支配御給人に取立てられた。⁽⁷⁴⁾尤もそれは「佐藤屋庄六」のまま、知行七〇石の給人「奈良伝右衛門」でもある忝人兩名で兼帯した。なお父庄重郎と兄弟二名もそれぞれ別名で給人であった。ところが安政四年（一八五七）、新田検地における隠田発覚等の廉により、奈良伝右衛門は父庄重郎とともに關所とされ、佐藤屋庄六の財産までも没収されてしまった。

その後、佐藤屋庄六は各地を転々とし花輪正摸と名乗る。そして上記事件より遙かに時代の下つた明治二十六年、藩政時代旧盛岡藩主南部利剛が、奈良伝右衛門の処罰とともに佐藤屋庄六の財産を没収したのは不法であるとして、旧藩主伯爵南部氏を相手取り、「佐藤屋庄六」の財産返還を求めて訴訟を起こした。最終的に花輪の敗訴となったが、同二十七年、花輪が発刊した『旧盛岡藩華族南部氏兇惡大略』なる著述がある。⁽⁷⁵⁾内容の過半は南部家への罵詈雑言と誹謗中傷で、そこに史料価値はない。筆者が注目するのは、これらを除いた、

近世における花輪自身と盛岡藩領における忝人兩名に関する証言である。

花輪は自ら「佐藤屋庄六ハ南部家領分第一ノ地位ニ在ル豪商也、然レトモ彼レハ傍ラ奈良伝右衛門ト家来格ノ名義有テ、一家兩名也」とその事実を述べ、⁽⁷⁶⁾「古来盛岡領分財産所有ノ者ハ、家来籍ト一人兩名義務ヲ負担シ、家来席ニ江戸屋敷造営御手伝献上金ヲ申付、之ヲ徴収シ、財産ニ係ル人民籍ニ分限割及高割ヲ徴収シ、又中奥御用方ナル者ヲ置キ、献上ヲ勸誘シテ秩禄高ヲ売り附ケ、人民ヲ家来席ニ加入シ、惡制至ラサル無シ」といった藩による売祿行為を前提とした「人民籍」と「家来籍」をもつ「一人兩名」の存在を南部家の「惡制」と批判しつつ、盛岡藩におけるその具体的な様子をも叙述する。それはこれまでみた他事例と比較しても符合する点が多く、一定の信憑性があると考ええる。そのため、聊か長い引用になるが、重要な証言であるので提示したい。⁽⁷⁷⁾

南部家規定支配家来席別（中略）^(a)○拝領屋敷所持無之、町村ニ住居スル者ハ平民戸籍ヲ設ケ、村並町並役金錢夫役相勤メ、右籍ニ同居居出ル事、^(b)○町村役地ニ住居スル者ハ平民籍ヲ元トシ、家来籍ヲ同居致シ、一人ニシテ兩名トス、町村役地ヲ買得ルモ借受ルモ同断、町村平民ノ方ニ同居スル者ハ、別ニ平民ノ名前ヲ設クルニ及ハス、

○^(c)拝領拝借諸土組付屋敷ハ一切ノ諸役免除ス、○^(d)家来席ノ者ハ身帯相当軍役ヲ務ムルノ外、一切ノ町村役ヲ免除ス、○^(e)役地田畑ヲ買得ル者ハ別ニ平民籍名義ヲ以テ売買可致候、家来席名義ヲ用ユルヲ禁止ス、○^(f)町村ニ於テ役地家屋敷貸家等買得ル者モ前同斷、○^(g)家来席ノ者ハ商業農業営ムヲ禁止、○^(h)家来席ノ者、商業営ム時ハ別ニ平民籍名義ニテ營業ノ諸役相勤ムル事、○⁽ⁱ⁾家来組付ノ何者ノ論無く、民籍名前エ被仰付候御用ハ、無異儀相勤候事、○^(j)家来席名義ヨリ起ル事件ハ、平民籍名義ニ不相拘候事、○^(k)平民籍名義營業ヨリ起ル事件ハ家来席名義ニ不相拘、一方ニ引受ル事、○^(l)民籍ノ營業ニ付、士分ノ威權兼用スルヲ禁止、○^(m)一人兩名ノ者、家来席平民籍同時ニ御用有之候節ハ、民籍代人差出候事、○⁽ⁿ⁾家来席ノ者、身帯家屋敷御取上ノ言渡シヲ受ケタル者ニシテ、町村役屋敷ニ住居ノ者ハ、内証自己ノ所有ト雖モ、平民戸籍ニ同居ノ訳ヲ以テ家屋敷不取上候事、○右ノ規定之アリ、如斯規定ノ明白ナルハ独リ南部家而已ナラス、諸大名御領私領ニ於テ多ク此ノ習慣之アリ候ニ付、御一新廢藩以後、文明政府ノ公布ヲ以テ、一人兩名ヲ禁止セラレ、華士族平民、不動産売買、及商工業許可セラレ候者ニ之レアリ

忝人兩名における処理実態を記したこれらの記事を整理す

ると、①町在所持地の名義処理(a・b・e・f)、②諸役負担の処理(c・d)、③農商業を営む場合の処理(g・h・l)、④士分名義と平民名義の關係(i・j・k・m・n)にわたり具体的である。要約すると、士分株を買得ないし士分取立をされた場合、平民籍・家来籍の二つを使い分ける忝人兩名となり、町在に居住の場合には、百姓町人宅に家来が「同居」するものと処理し、同居しない場合は家来籍とは異なる「平民籍ノ名前」を設定する(これは平民宅に家来が同居する建前で処理される忝人兩名)。二つの身分それぞれの役割を別人として果たすことで、二重身分ではないものとして調整されていたことがわかる。

盛岡藩領での忝人兩名の存在は、安政六年七月、彦根藩井伊家御小人目付が収集した北国風聞のなかにも、盛岡藩領浄法寺町に在住する士分の小田島勘助が、元来は「伊勢屋儀兵衛」というもので、三〇〇両を領主に上納して知行五〇石の士分となり、かつ検所の株式を「無理非道にて自分のものになし、当時一人兩名にて、検所にては儀兵衛と名乗、在住の士にては小田島勘助と名乗」つたみえる。実際同藩では藩財政の悪化を補う為、「寸志」(所謂金上げ)や「新開」により給人化する者があり、例えば鹿角郡の新給人は、給人としての名前と百姓町人の名前を持ち、後者を「通り名」と呼ん

で兩名を使い分けていたことが確認されている。⁽⁸¹⁾萩藩の「下札名」同様の調整方法といえよう。

花輪の利害と一致する j・k・n の主張等をそのまま信じることができないが、本稿で論証した事実を踏まえれば、忝人兩名の現実の取扱方法として、十分あり得るものである。また前述の加賀、萩、紀州等の例を参照すれば、「諸大名御私領ニ於テ多ク此ノ習慣之アリ」という叙述も事実として認め得る。

(5) 社家と非藏人の兼帯

「株」の二重保持同様に、身分格式の異なる二つの役割を一人が担う場合、忝人兩名による調整が行なわれた。近世、内裏の雑務を担った非藏人⁽⁸²⁾は、社家による兼任が多かったが、その場合、社家としての名前とは別名を用いる忝人兩名の形態を取った。勢多章甫著『思ひの俣の記』に次のようにある。⁽⁸³⁾

非藏人は、賀茂、松尾、北野、稻荷、梅宮、新日吉等の神官より兼勤する也。又其子弟より補せらるゝもあり。又神官に非ざるもあり。(中略)皆本職神官の方にて四位、又は五位の位階あり。非藏人の方にては無位無官にて、一人二名のもの也、皆国名を呼ぶ。大和、河内の類なり。

近世身分支配と忝人兩名

これを裏付ける記述は、松平春嶽の「京都日記」にもみえる。慶応三年(一八六七)六月十六日、春嶽は下鴨社を参詣し、禰宜鴨脚丹波守・鴨脚越中守、非藏人松尾丹波の出迎を受け、彼等について次のように記述している。⁽⁸⁴⁾

御所非藏人^(ひくらうど)ハ加茂其外の社家^(つゝ)出るナリ、丹波守ハ正四位下なり、越中守^(鴨脚)ハ從四位上なり、非藏人相勤候、非藏人のかたにてハ、丹波守者和泉といひ、越中守ハ加賀といへり、非藏人にてハ六位ナリ、一人兩名なり。松尾丹波者非藏人なり、社家ニあらず、ゆへに一人兩名てハなく候。

つまり下賀茂の社家正四位下鴨脚丹波守は、非藏人としては六位(實際は無位が正しい)の鴨脚和泉、同社家の從四位上鴨脚越中守は、非藏人としては無位の鴨脚加賀と名乗る「一人兩名」で、松尾丹波のように社家兼勤ではない非藏人、つまり「一人兩名てハな」いものもあつた、と詳述している。位階を持つ社家のままでは、無位を要件とする非藏人にはならない。故に社家とは別人とする忝人兩名を以て、身分格式の矛盾が調整されたのである。

(6) 身分・職分の分離支配

既に別稿でも指摘したように、二重身分・忝人兩名は、二

重身分ではなく「身分」と「職分」であると解釈する調整方法も行われた。

地下官人真継家による職分支配が行われた鋳物師もこうした方法をとっている。嘉永二年閏四月、加賀藩鋳物師間の争論において、町人釜屋九左衛門は、鋳物師として「苗字御免許ニ候得共、町規ニ付而者商売之名ヲ家名ニ相用、釜屋と相調」といると述べており、実際に釜屋九左衛門は鋳物師としての名前は「横河九左衛門」と真継家に把握され、町人身分では屋号、職分では苗字を公称して名前の異なる町人両名であった。この訴訟相手の鍋屋仲兵衛も鋳物師由緒の主張で、「御用職官等其人一代限りニ御座候而、於三都も一人両名之義御見通ニ相成居申候」等と三都でも町人両名の形態であることに言及している。加賀藩の場合は、町人身分で鋳物師の「職分」を兼帯する存在形態を許容しているようだが、藩により職分支配への対応は異なっていた。例えば高崎藩の場合、真継家が高崎の町人に鋳物師の「職分」上の苗字帯刀を許可した際、「苗字帯刀之義ハ、非常たりとも御領分人別ニては不相成」として、「職分」限定でも認めていない。⁸⁷

領主側は、こうした領民個人の身分的多様性を、百姓・町人身分のまま、他身分を職分として兼帯するものと理解する。しかし実は領主側が「職分」と理解している身分を支配する

側は、神職や御師身分のものが、活計上農商工業を営む百姓、町人という職分を勤めていると理解しており、同一人物の二重身分をめぐる身分・職分の解釈には、二つの支配側において矛盾が存在した。⁸⁸

例えば近世後期の鉦打は、鉦打としては総本山である藤沢遊行寺の支配下にあり、「沙弥共身分ニ付、何事ニヨラス其小本寺ヨリ下知差引」を受けるが、所持の屋敷田畑等の「地面ニ相拘り候儀」は「其所之地頭領主ヨリ百姓同様」に扱われており、領主からすれば、百姓町人が鉦打を職分として兼帯していると理解される。⁸⁹しかし鉦打の触頭である浅草日輪寺は、寺社奉行に「(鉦打は)本業之和讃念仏ヲ相唱ヘ信施ヲ受候ハカリニ而ハ渡世相送兼候、依之或者耕作或者商売等之渡世産業ヲ仕候」と述べており、「本業」が鉦打で「渡世」の為に「耕作」「商売等」をしている、つまり鉦打身分で、百姓町人を職分として兼帯すると主張している。このように支配側により、身分・職分理解には矛盾がある。しかし二つの身分兼帯を身分(主)と職分(副)と見て、都合よくその主・副の逆転させる支配側の認識によって、二重身分が表面上穏便に成立しているともいえる。

かかる身分・職分の分離取扱をおこなっても、人の体は一つしかない。しかし公儀の訟廷における座席は、身分別に位

置を異にするものであったから、こうした二重身分を奉行所等と呼出して吟味する時、事件の審理以前に白洲での座席が問題化し、重大な支障を発生させるようになる⁹⁰。故に身分・職分兼帯や忝人兩名に対し、近世後期にはその取扱に対する措置も講じられた。

京都町奉行所・大坂町奉行所管内では、宮・摂家・堂上公家による百姓・町人の家来化が進行したため、百姓・町人の「堂上方・武家方家来」化自体は、奉行所への届出手続を踏めば公認しつつも、未届で家来となった者に問題が生じて吟味となった場合、「已前之町人或ハ百姓之躰ニ被引落⁹¹」て取扱う内規を定めている。殊に大坂町奉行所においては、百姓・町人が「堂上方・武家方家来」となる時点で、百姓・町人時代におこした事件については「町人百姓御引戻し御裁判⁹²」されることを本人に誓約させていた。実際次のような事件がある。

文政五年、大坂天満竜田町の借家に住む町人光右衛門は、堂上公家山井家の家来となり「玉氣藏人と名乗、帯刀」し、同家の命で讃州代参の旅に出た。光右衛門はその道中において不法行為を行なった廉により、大坂町奉行所から三十日手鎖の処罰をうけた⁹²。そこでは「玉氣藏人と名乗帯刀いたし候段は、山井家より内々申渡有之趣に付、強て不埒とも難申」

とされ、光右衛門＝玉氣藏人の家来化・忝人兩名自体は処罰の対象とはなっていないが、ここで玉氣藏人ではなく、光右衛門として処罰されたのは、光右衛門の「玉氣藏人」化は「山井家より内々申渡」たものの、つまり大坂町奉行所への未届の家来化であったため、規定通り町人光右衛門に引戻され、町人として吟味・処罰されたことを意味するのである。

以上、近世忝人兩名の事例を博搜してきたが、その共通する目的は、身分別の支配を基礎とする近世社会において、一人が二つの支配領域を跨ぐ状況が生じたとき、各支配それぞれで身分相応の名前（従来から存在する株の名前を襲うなど）を用い、これらを使い分け、それぞれの役割を果たすことで、身分別支配に齟齬をきたさない状況を作り出し、調整する点にあった。

近世の支配は、「複数の身分的側面を持つ個人」として、個人の多様性を一元的に把握することはない。身分集団を媒介とした身分別支配が前提・原則である以上、各身分集団・支配側は、支配領域と対象を、それぞれが犯すことなく安定的に支配することを希求する（但し支配領域の拡大を望む者も生じ、支配間の衝突も生じる）。個人もこの原則に則り、忝人兩名の存在形態をとることで、建前上従来の身分秩序を維持しつつ、現実には多様な活動を実現している。忝人兩名

は、こうした身分別支配の建前と実態とを調整している作法であり、この作法によれば、さまざまな身分を兼帯する二重身分（勿論三重・四重のものもあると推測される）となることが可能であった。表面上厳格な近世身分秩序は、こうした調整方法によって維持されていたのである。

三 近世𡔷人両名の終焉

（一）国家による国民管理と戸籍法

近世𡔷人両名は、「天下の御法度」という建前でありながらも、近世社会の身分別支配を、表面上穏便に実現させる作法として機能し、その人別（戸籍）も二重化して処理されていた。⁹³しかし明治になると「国民」の一元的管理手段としての戸籍編成が重視され、個人の名前を戸籍に記載された一名義に限定するようになると、二重戸籍の𡔷人両名は、当然その阻害要素として排除されていった。

京都では明治初年から、町人・百姓で地下官人や公家・武家の家来を兼ねる存在の𡔷人両名が問題視され、その処分が検討された。⁹⁴即ち明治元年（一八六八）十月、京都府は弁事宛の伺書において、「農工商ニ而、朝廷御用相勤候者并宮堂上方・諸藩及び社寺之用達相勤候もの之内、苗字を称シ帯刀

仕、或者家来と成、尚民籍を不脱ものも有之、事曖昧に涉り戸籍正しからず、方今御一新之折柄、右等之部判然与有之度」とし、「家来ニ相成、尚民籍を不脱もの者、一人両名ニ付、屹度被差留」べきとして、𡔷人両名の処分を建議した。しかし同二年三月になつても「駕輿丁・檢非違使、其外御所御用相勤候者ハ、苗字ヲ称シ両刀ヲ帶シ、尚商籍ヲ不脱、一人両名ト相成」つてゐる状態は「其俛」であり、地下官人として留守官に把握されつつ、「商籍ニハ町人名前ヲ以テ編入」されて京都府に把握される二重戸籍状態が続いた。旧官人（明治二年百官廃止以降、地下官人は「旧官人」と総称された）のかかる状態は、同三年十二月旧官人を士族・卒・町籍に分ける「旧官人御所置」まで続いた。

地下官人等に限らず、他にも神仏分離令を受けた明治二年三月には、岩鼻県が神祇官に対し、「御一新之機会」に乗じて、これまで別当社僧の驥尾に付していた「御師ナドト唱へ配札候輩」が、別当にも役人にも県庁にも無届で「突然其筋へ出願、許容ノ付札ヲ持帰り、社僧ヲ驅逐シ村吏ヲ強圧スル類」があり、彼等は「淫祠ニ等シキ小社ヲ開称シ、猥ニ神人社人ニ願出、百姓人別ニハ何兵衛何助、神主何某ナド唱へ、全ク一身両名ヲ称シ候類」であると言及して非難しているように、⁹⁶𡔷人両名の二重身分が県の統治を阻害する問題とみ

なされている。

明治四年四月の戸籍法は翌五年に施行されるが、この前後、売人兩名に対する解消措置が講じられた。同年四月晦日、大阪府では市中に多く存在した町修験らについて、「百姓・町人等、一身兩名ニ而、修験道相立候義、向後急度差留候条、仏像類所持有之分ハ、速ニ最寄之寺院等へ相納、本業専一ニ可相當候事」として売人兩名の解消を命じ、また前述した加賀藩における真宗道場の売人兩名も解消が命じられ、加賀国能美郡長瀧村直参道場宗誓寺は、「明治五年二月戸籍御改正之際、一人兩名之廉ヲ以テ、地方庁ヨリ道場号モ被廃止、僧業モ表難相成」⁽⁹⁸⁾となったという。

明治四年戸籍法は、従来の身分別の人別把握から、居住区を単位に族籍の別なく国民を把握する属地主義へ変更した⁽⁹⁹⁾。故に身分別支配を前提として、各支配に合わせて二重身分を調整していた近世売人兩名は、この存在形態の前提自体が覆り、その意味を失ったのである。

(2) 同居と家名

しかし近世身分別支配を前提に、作法・慣習的に行われてきた売人兩名の解消は容易ではなかった。

戸籍法施行後の明治五年四月九日、大阪府では戸籍編成心

得が再度詳しく通達された⁽¹⁰⁰⁾。売人兩名に関する事項を挙げる
と、①「從來其戸主病身歟、或ハ幼少歟、或ハ名前可相立男
児無之分ハ、代判と唱へ、別人の名前を以、公私之用を弁じ
来り候得共、右ハ一身兩名之弊を生じ、現員之実を失ひ候ニ
付、自今停止」、②「女ノミにて、可相立男児無之より、全
くの空名を掲げ置」ことは「自今嚴重停止」、③借家貸渡し
の際、「借り人へ直々不貸渡、外ニ名前人を相立、現実之借
家人ハ、名前人へ同居之姿を以貸渡し来候向も有之候所、現
在名前人ハ家持ニて他町二人別有之、一身兩名ニ相成候間、
向後ハ借人へ直貸渡し可申」こと。④「是迄名前人と唱、人
体無之者、又ハ数年前死去等之者、其尙無実之名前相表し、
現在之人体無之、所謂有名無実なるもの、向後急度可相改」
とし、一戸一名の原則で「此家二名前有之、又彼の家にも名
前有之候而者、一身兩名ニ相成候間、能々注意いたし、不差
支様可相改」と命じた。つまり①は戸主の名前とは無関係に、
代判などの形で家業の名跡を残し「公私之用を弁じ」る行為
を「現員之実を失」う売人兩名を生じるものとして禁止、②
は男子不在で現実には「女ノミ」であるのに従来の亡夫亡父
等の名前（家名・名跡）をそのまま使用する行為を「空名」
として禁止（①②は家名と家業と一体化した「株」を立てる
行為の禁止でもある）、③は身分違調整のための名代（名前

人」設定や「同居」処理の禁止、④は株の名跡や、架空の名代などの「現在之人体無之、所謂有名無実なるもの」、つまり非実在の名前を使用・保持することの禁止、という内容で、近世尅人兩名による調整を、概ね網羅的に言及して禁じている。

しかしこのうち②、即ち女戸主による男性名の家名を使用する慣行（実際にはいない亡父・亡夫の名前をそのまま残す行為）は、名跡が家業と一体であったため、長らく解消されずに問題となった。山梨県における明治七年二月の戸籍編成法布達付録には、「一、戸主幼少ナル歟、或ハ婦女ノミニテ戸主ニ可相立男兒無之ヨリ、空名ヲ揚ケ置候向モ有之趣ノ処、右ハ一身兩名ニシテ現実ノ実ヲ失ヒ、不都合ニ付、幼少ノ者又ハ婦女ニシテ戸主ニ相立候儀ハ不苦訳ニ付、急度相改メ、或ハ空名ヲ記シ、或ハ現員脱漏等無之様、詳カニ取調、現実ノ人員ヲ記載スヘシ」とみえる。⁽¹⁰⁾「株」を前提に名跡と職業を一体として使用する行為は、戸籍の名前を唯一の名前として個人を管理する社会において、単なる「空名」の使用で「現実ノ実ヲ失ヒ、不都合」なものみなされ、禁じられたのである。

更に戸籍上戸主を女性本人の本名にしても、職業上はやはり亡夫亡父の名（世襲の名跡）を用いるものが跡を絶たなか

った。明治八年一月の敦賀県伺にも、「戸主トナツタ寡婦ガ其ノ家ノ職業上ノ便宜ノタメニ亡夫ノ名ヲ襲グトノ許否」⁽¹¹⁾がみえる。敦賀県は「戸主死シテ嗣子無キ乎、或ハ幼少ナルトキ其妻戸主トナリ家事ヲ執ルアリ、戸籍面ハ寡婦ノ戸主ニ引直シ、其家ノ職業取引ノ節ニ臨ミテハ、其亡夫ノ名ヲ相用ヒ全一人兩名」の者があり、その場合、職業取引上訴訟のことがあればたちまち「名実相違シ不都合」であるとした。しかし敦賀県はこれを「不得止ノ儀ニ付黙許ニ附シ置不苦ヤ」とし、なおも「取引上ノ便否ヲ問ス断然其自名ヲ唱ヘサスル乎、然ラサレハ其女子ノ名ヲ改メ先夫男子ノ名ヲ襲ハシムルニ非サレハ、全ク一人兩名タルヲ免レス、如何」と伺った。敦賀県側は「便否」を無視した「断然」とした処理の不都合を述べ、近世的な発想である「黙許」を模索している。しかし内務省はこれに「商業上差支候連、亡夫ノ名ヲ襲ハシムル儀ハ難相成候条、其婦ノ自名ヲ唱用可致事」と指令し、名前を戸籍名のみとする一人一名の方針を貫いている。

（3）近世尅人兩名の埋没

複名習俗は、近世において尅人兩名と呼ばれることがなかった。しかし戸籍編成のための一人一名化政策の進展につれ、タテ・ヨコの複名習俗と支配調整の作法たる近世尅人兩名と

が、同じく「一人で二つの名を持っている」『違法な「𡵿人兩名と呼ばれるようになり、近世の意味は、新たな近代𡵿人兩名の意味の中へと埋没していく。』

その傾向は、早くも明治三年四月十八日、品川県庁が「^(明)当午^(三)戸籍差出候以後、猥ニ男女与も改名いたし候義者不相成」として高札場へ張出した次の通達からも窺える。

一、是迄公儀名与唱へ、又者幼名を呼、𡵿人、兩名之唱へ間々有之、紛敷儀ニ付、以来都而戸籍ニ書載之外相唱へ中間敷事

ここでいう「𡵿人兩名」とは、近世におけるそれではなく、所謂タテの複名習俗である。「戸籍ニ書載」た名前だけの使用命令は、明治五年五月七日の「従来通称名乗兩様相用候輩、自今一名タルヘキ事」とする太政官布告、所謂複名禁止令により確立する。これはヨコの複名習俗を禁じたものであるが、更に同年八月二十四日の改名禁止令では、幼名からの改名、当主名の襲名など、タテの複名習俗をも禁止された。複名と改名自由の習俗は、国家による国民の管理を困難にする行為とみなされ、ここに否定、禁止されたのである。^(四)

この複名禁止令は、職業上の芸名をも規制する法令として受け止められた。明治五年九月、京都では「過日、一人兩名不相成旨公文アリシヨリ、京師所々ニテ興行スル女浄瑠璃ノ

太夫、何松、何吉トナド唱ヘシ者、悉ク本名ニ改メテ看板ヲ出セリ」という状況が生じ、戯作者も山々亭有人は条野伝平、二世為永春水は染崎延房、などと実名で活動することになった。^(五)但し明治八年八月九日、筑摩県が「一人兩名ヲ称スルハ不相成候得共、演劇其他技芸上ニ於テ別名ヲ称スル等ハ、差支無之ヤ」と伺ったのに対し、内務省は「書面一人兩名ハ固ヨリ不相成、尤芸業上於テ別号ヲ称用スル儀ハ差支無之候事」と回答しており、後「演劇其他技芸上」の別名使用や改名・襲名は、明治十三年までに次第に緩和されるが、一人一名主義は法制上今日まで継続している。

こうした明治初年における、戸籍名を唯一の名前（本名）とする一人一名化政策を通じて、元来別のものであった近世𡵿人兩名と複名習俗は、同じく戸籍名以外の名前を名乗る違法行為として混同されていく。それは、第二章で述べた明治二十六年の花輪正摸の裁判において、花輪の説明する近世𡵿人兩名の意味を、判事小杉直吉が全く理解できなかったことに表れている。花輪は、自分の言う近世𡵿人兩名が理解されぬもどかしさを、「小杉直吉ハ、一人兩名ト云ヘバ、今日ノ強窃盜等ガ初犯ニハ南町修助名前ニテ刑ヲ受ケ、二犯ニハ北町ノ信助ト云名前ニテ刑ヲ受ケタルモノト同然ニ思フハ、裁判官タル者ノ無知識ナリ」と憤慨している。しかしそれは、独

り小杉の「無知識」ともいえない。国家による国民の一元的管理と、法制上の一人一名が浸透・定着した明治末期、近世の身分別支配を前提とする、近世𡵿人兩名の意味を理解することは、最早容易ではなくなっていたのである。

おわりに

本稿は身分・支配・名前の関係に着目して、𡵿人兩名の諸事例を分析し、その共通する意義と本質を明らかにした。

近世𡵿人兩名は、身分別支配を原則とする近世社会において、一人が二つの身分を兼ねる様々な事態が生じた時、従来の支配関係が維持されるよう調整することに、その共通する意義があった。故に近代になって、近世の身分別支配の構造が消滅したとき、𡵿人兩名という存在形態はその意味を失い、複名習俗とも混同され、忘却されていったのである。

身分別支配の建前維持を重視した𡵿人兩名という調整行為には、近世の支配・被支配側の相互が、基本的に社会秩序の表面的穩便を希求する意識が反映されている。それは各支配上の体裁さえ調えられれば、個人の存在形態の多様化に対し、支配側が強く干渉しなかったことも意味する。かかる意識は近世支配の基本的特質ともいえる。こうした建前の調整を行なってまで身分の重複が回避される点は、中国で士大

夫が地主や商店主を兼ねることが普通に存在することと対照的であり、身分別支配やその建前維持の調整を目的とした𡵿人兩名という行為は、近世日本の特質として解されねばなるまい。

また本稿で明らかにしたように、近世には支配を跨ぐ多様な場面で𡵿人兩名が多く発生していた。故に史料上は別名別人としか判断できない存在が、実は同一人物である可能性があり、今後は𡵿人兩名を考慮した研究も必要となる。なお、本稿は𡵿人兩名の諸事例を博搜してその本質を分析したが、個別事例を通じた微視的分析も必要である。今後の課題としたい。

註

- (1) 𡵿人兩名はイチニンリョウウメイ／或はリョウウミョウと読む。近世の節用集には、類語の「一事兩様」(イチジリョウウウ)、「一体分身」(イツタイブンシン／フンジン)が、『邦訳日葡辞書』(岩波書店、一九八〇年)や節用集の古本以来明治期までみえる(『節用集大系』全一〇〇巻、大空社、一九九三～一九九五年)。𡵿人兩名もこれと同様熟語読みしたとみられ、後述の川柳は「𡵿人、兩名」とも表記されており、音読したことが証せられる(註27)。「柳多留」ではヒトリと読む場合「一人リ」とも表記され、イチニンと区別される。なお節用集では「人」・「名」を含む熟語はニン・ジン、メイ・ミョウの両音が並存しているが、筆者は「𡵿人兩

名・「イチニシリョウメイ」の表記と読みを以て、学術用語として使用している。

- (2) 拙稿A「公家来と百姓の耆人兩名―大島數馬と利左衛門―」(『地方史研究』三六〇号、二〇二二年、のち拙著『近世京都近郊の村と百姓』(思文閣出版、二〇一四年)第四章)。
- (3) 拙稿B「近世禁裏御香水役人の実態―地下官人の職務・相続・身分格式―」(『古文書研究』七五号、二〇一三年)。
- (4) 拙稿A・B、拙稿C「京都近郊相給村落における百姓の「耆人式名」」(『日本歴史』七四六号、二〇一〇年、のち前掲拙著第二章)、拙稿D「近世「耆人兩名」考」(『歴史評論』七三二号、二〇一一年)、拙稿E「吟味座席と身分・職分」(『日本歴史』七六六、二〇一二年)、拙稿F「地下官人と耆人兩名の終焉―近世二重身分の作法とその解体―」(『鷹陵史学』四〇号、二〇一四年)、拙稿G「近世の帯刀と身分・職分―「非常帯刀」の設定と逸脱―」(『日本歴史』七九八号、二〇一四年)。
- (5) 朝尾直弘「近世の身分とその変容」(朝尾直弘編『日本の近世7』中央公論社、一九九二年)、同「十八世紀の社会変動と身分の中間層」(辻達也編『日本の近世10』中央公論社、一九九三年)、ともにのち『朝尾直弘著作集 第七卷』(岩波書店、二〇〇四年)。
- (6) 塚田孝・吉田伸之・脇田修編『身分的周縁』(部落問題研究所、一九九四年)、『シリーズ近世の身分的周縁』全六巻(吉川弘文館、二〇〇〇年)、『身分的周縁と近世社会』全九巻(吉川弘文館、二〇〇七年)等。
- (7) 神立孝一「八王子千人同心」(『シリーズ近世の身分的周縁5』二〇〇〇年)、久留島浩「牧士」(同上)。吉田ゆり子

「山門の公人」(吉田伸之編『身分的周縁と近世社会6』二〇〇七年)。西村慎太郎「地下官人・中村佳史「摂家の家司たち」(高埜利彦編『身分的周縁と近世社会8』、吉川弘文館、二〇〇七年)、藤實久美子「書物師・小野将「国学者」(横田冬彦編『シリーズ近世の身分的周縁2』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

- (8) 註(5)朝尾論文、久留島浩「支配をささえる人々」(前掲『近世の身分的周縁5』)、註(7)西村論文。「身分状態」は、塚田孝の所論(同『近世日本身分制の研究』、兵庫部落問題研究所、一九八七年)が念頭にあらう。
- (9) 横山百合子「明治維新と近世身分制の解体」(『日本史講座 第七巻』、東京大学出版会、二〇〇五年)、拙稿D。
- (10) 横田冬彦「鑄物師」(塚田孝編『シリーズ近世の身分的周縁3』、吉川弘文館、二〇〇〇年)。
- (11) 「江戸」の人と身分」全六巻(二〇〇九、二〇一一年)、深谷克己・須田努編『近世人の事典』(東京堂出版、二〇一三年)。
- (12) 大橋幸泰「シンボジウム「身分論をひろげる」の記録」(『江戸』の人と身分6『吉川弘文館、二〇一一年)。
- (13) 堀田幸義「近世武家の「個」と社会」(刀水書房、二〇〇七年)、大藤修「日本人の姓・苗字・名前」(吉川弘文館、二〇一二年)。
- (14) 上野和男「名前と社会をめぐる基本的諸問題」、井戸田博史「名前をめぐる政策と法」(上野和男・森謙二編『名前と社会』、早稲田大学出版部、二〇〇六年)、前註大藤著書。
- (15) 拙稿D。
- (16) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇〇年)「いち

- にんりようめい【二人両名】の項。
- (17) 『兼俱本宣賢本日本書紀神代卷抄』(統群書類従完成会、一九八四年)二二三頁。
- (18) 川口高風『諦忍律師研究 下巻』(法蔵館、一九九五年)九二七頁。
- (19) 中田武司編『田中大秀 第三巻』(勉誠出版、二〇〇一年)一六八頁。
- (20) 『隨筆百花苑 第八巻』(中央公論社、一九八〇年)三五四～三五五頁。
- (21) 『隨筆百花苑 第十四巻』(中央公論社、一九八二年)二五三頁。
- (22) 滝沢馬琴『吾仏乃記』(八木書店、一九八七年)二六三頁。
- (23) 明治三年『方伎雜誌』卷三・廿七～廿八丁(国立国会図書館デジタル化史料)。
- (24) 忝人両名の「禁制」意識については拙稿D。
- (25) 拙稿D。
- (26) 瀬川如皐作・河竹繁俊校訂『与話情浮名横節』(岩波書店、一九五八年)。
- (27) 岡田甫校訂『誹風柳多留全集 第二巻』(三省堂、一九九七年)六九頁、同上 第九巻「一〇〇頁」。
- (28) お万斎とは、宝暦の頃より江戸京橋・中橋の中間で売り出された名物という(『江戸時代語事典』、角川書店、二〇〇八年)。
- (29) この表現は、註(14)井戸田論文による。
- (30) 拙稿D。
- (31) 『新潟県史 資料編九 近世四 佐渡編』(一九八一年)三一(五一三～五一四頁)。
- (32) 『岡山県史 第二十五巻(津山藩文書)』(一九八一年)、五四頁。
- (33) 横田冬彦「近世的身分制度の成立」(註(5)『日本の近世7』)。
- (34) 「二人二而所人別ニ加り候者」は「急度叱り」(『徳川禁令考 後集第二』創文社、一九六〇年、七二頁)。
- (35) 瀧本誠一編纂『日本經濟大典 第二十三巻』(啓明社、一九二九年)四七〇頁。
- (36) 速水融『歴史人口学研究』(藤原書店、二〇〇九年)。
- (37) 『東海市史 資料編 第二巻』(一九七四年)一六二～一六三頁。
- (38) 『山口県史料 近世編 法制下』(山口県文書館、一九七七年)五八六頁。
- (39) 拙稿Dでもこの点は言及した。
- (40) 『松前町史 通説編 第一巻下』(一九八八年)七三九～七四〇頁、『高倉新一郎著作集 第二巻』(北海道出版企画センター、一九九五年)解説・松前出稼商人の戸籍」。
- (41) 田端宏「史料紹介」松前表出店之者名前等御尋之義二付御答書・松前出店人別一条写」(『松前藩と松前』第一三号、一九七九年)。
- (42) 『近江日野の歴史 第七巻』(二〇一二年)七～八頁。
- (43) 出店に限らず、商業上の株買得(及びその株の名跡の獲得)により、人別帳上の名前と株仲間の名簿での名前に相違にも着目すべきであろう。
- (44) 註(5)朝尾直弘「近世の身分と社会の変容」、同「泰平の世」(同編『週刊朝日百科 日本の歴史』六七号、朝日新聞社、一九八七年)。のち註(5)『朝尾直弘著作集 第七巻』。

- (45) 近年、百姓株については、戸石七生「百姓株式と村落の共済機能の起源―上名栗村古組の村落と小百姓の家―」（『共済総合研究』第六七号、二〇一三年）、同「日印の伝統農村の共済機能―地域社会における社会的分業の比較史的研究―」（同上第七〇号、二〇一五年）等が、共済機能や家族史の関心から着目し、詳しく論じている。
- (46) 高埜利彦「相模年寄」（『シリーズ近世の身分の周縁3』、塚田孝「下層民の世界」（註5）『日本の近世7』）。
- (47) 「人間市史 近世史料編」（二九八六年）一五七（三六九）三七二頁。
- (48) 横山百合子『明治維新と近世身分制の解体』（山川出版社、二〇〇五年）。
- (49) 東京大学史料編纂所『大日本近世史料 市中取締類集十六』（東京大学出版会、一九八四年）一三三―一三八頁。
- (50) 東京大学史料編纂所『大日本近世史料 市中取締類集十六』（東京大学出版会、一九八六年）二二五頁。
- (51) 拙稿D。なお、神職については同稿で述べた。本稿では割愛。
- (52) 遠藤克己『近世陰陽道史の研究』（未来工房、一九八五年）一八三頁。
- (53) 『厚木市史 近世資料編（1）社寺』（一九八六年）三九七（七四一―七四二頁）。
- (54) 平野栄次『富士信仰と富士講』（岩田書院、二〇〇四年）。なお、伊勢御師の類は、百姓でありつつ御師でもある存在で、吟味座席も身分・職分で別に取扱われた（拙稿E）。
- (55) 橋本鶴人「習合神道神事舞太夫に関する一考察」（『所沢市史研究』第一九号、一九九六年）。
- (56) 脇田修「近世封建制と部落の成立」（『部落問題研究』三三

輯、一九七二年）。

- (57) 石川卓美編修『山口県近世史研究要覧』（マツノ書店、一九七六年）五〇・六三頁。
- (58) 林元「渡辺新七の「日記」にみる山口藩禄制改革」（『山口県史研究』第二一号、二〇一三年）。萩藩浦家家来の「百姓名前」使用事例もある（上田純子「幕末の軍団」、前掲『身分的周縁と近世社会7』）。
- (59) 註(57)『山口県近世史研究要覧』五〇・六三頁。
- (60) 千葉乗隆『地域社会と真宗』（法蔵館、二〇〇一年）二四九―二五〇頁、高瀬保「加賀藩流通史の研究」（桂書房、一九九〇年）一章一節。
- (61) 片倉比佐子「江戸の土地問題」（同成社、二〇〇四年）。
- (62) 『類集撰要』（国立国会図書館所蔵・請求番号八〇四・四、データベース閲覧）。この内密書については前註片倉著書でも言及されている。
- (63) 拙稿A。
- (64) 『新訂寛政重修諸家譜 第二十』（続群書類完成会、一九八六年）卷千三百二十六（一二二頁）。
- (65) 註(20)『随筆百花苑 第八巻』三九七―四〇三頁。
- (66) 『日本随筆大系23（翁草5）』（吉川弘文館、一九七八年）四二一―四二三頁。なお、『翁草』は「平八」とするが、平十郎が正しい。
- (67) 註(20)『随筆百花苑 第八巻』三九八頁。
- (68) 註66『日本随筆大系23（翁草5）』四二一―四二三頁。
- (69) 『随筆百花苑 第九巻』（中央公論社、一九八〇年）三一頁。
- (70) 「以上并武家御扶持人例書」（『近世法制史料集 第三巻』、創文社、一九七七年）九八・九九頁。

- (71) 第一章で述べた大里屋茂兵衛も、従来の財産を維持するために「伊平次」の名を保持していたものと推測される。
- (72) 『和歌山県史 近世史料二』(一九八〇年) 五九七頁。
- (73) 吾人兩名が「同居」と処理されたものは、公家家来や(註7)中村論文。地下官人の例がある(西村慎太郎『近世朝廷社会と地下官人』第二部第一・二章「吉川弘文館、二〇〇八年」、註(7)西村論文)。
- (74) 『鹿角市史 第二巻下』(一九八七年)、奈良寿「佐庄欠所に関する文書二つ」(『上津野』第七号、一九八二年)。
- (75) 明治二十七年十一月『旧盛岡藩華族南部氏兇惡大略』(岩手県立図書館所蔵、請求番号・新21・5・69)。花輪正摸については佐々木京一『南部盛岡藩の権力闘争』(国書刊行会、一九九五年)も参照した。
- (76) 前註『旧盛岡藩華族南部氏兇惡大略』四四頁。
- (77) 同上三〇頁。
- (78) 仙台藩や盛岡藩では、武士身分を売る公定価格を定めていた(深谷克己『江戸時代の身分願望』、吉川弘文館、二〇〇六年)。
- (79) 註(75)『旧盛岡藩華族南部氏兇惡大略』五〇～五一頁。
- (80) 井伊正弘編『井伊家史料幕末風聞探索書 復刻版 中 安政六年編』(雄山閣、一九九九年 二九七～二九八頁)。
- (81) 『秋田県史 第三巻 近世編下』(一九七七年) 四八八～五二四頁、第一七一表。
- (82) 西村慎太郎「近世非蔵人の門跡肝煎」(『日本歴史』七五六号、二〇一一年)。
- (83) 『日本随筆大成13』(吉川弘文館、一九七五年) 三二頁。
- (84) 『福井県史 資料編3 中・近世1』(一九八二年) 二二〇頁。
- (85) 『金沢市史 資料編7』(二〇〇二年) 三六一～三六八頁。
- (86) 笹本正治「真継家と近世の鋳物師」(一九九六年、思文閣出版) 四四七頁。
- (87) 藩法研究会編『藩法集5 諸藩』(創文社、一九六四年) 高崎藩・雜記一九二(七八八～七八九頁)。
- (88) この身分・職分理解における乖離は、拙稿B。
- (89) 『内閣文庫所蔵史籍叢刊9 祠曹雜識』(三)(汲古書院、一九八一年) 二二六九頁。
- (90) 拙稿D・E。
- (91) 『京都町奉行所科定類聚』(国立国会図書館所蔵) 卷之三「百姓町人堂上方并武家方之家来二相成候事」。
- (92) 『御仕置例類集(第九冊) 続類集二』 一一五四。
- (93) 拙稿B・F。
- (94) 註(14)井戸田論文、井戸田博史「『家』に探る苗字となまえ」(一九八六年、雄山閣)、森謙二「家(家族)と村の法秩序」(『新体系日本史2 法社会史』、山川出版社、二〇〇一年)等。
- (95) 拙稿F。
- (96) 『群馬県歴史 三巻』(群馬県文化事業振興会、一九七四年) 六二～六三頁。
- (97) 『大阪府布令集 一』(大阪府、一九七一年) 三三六頁。
- (98) 『辰口町史 第二巻前近代編』(一九八七年) 宗誓寺文書八〇三～八〇八頁。なお、その後明治一二年一月に至り漸く寺号許可となる。
- (99) 註(94)。
- (100) 前掲『大阪府布令集 一』 五〇四～五〇六頁。

(101) 『福島正夫著作集 第九卷』(勁草書房、一九九六年) 五五八頁。

(102) 外岡茂十郎編『明治前期家族法資料 第九卷第二冊』(早稲田大学、一九六七年) 六六三(三一頁)。

(103) 『大田区史(資料編) 加藤家文書2』(一九八五年) 一三六頁。

(104) 以下複名・改名の禁止は註(95)井戸田氏論文・著書による。

(105) 興津要『仮名垣魯文(二)』(『文学』五二号、一九八四

年)。

(106) 井戸田博史「明治前期の改名禁止法制」(『帝塚山法学』第一号、一九九八年)。

(107) 渡辺浩『近世日本社会と宋学』(東京大学出版会、一九八五年) 四三〜四八頁。

(108) 壱人兩名の者は、兩名義で同印を使用する事例もあり、その場合は印が手がりとなる(拙稿C)。